

海外の登山

西ネパール サイパル(7,031m)・北面の記録

野沢井 歩

西ネパール・サイパルへ

現在、ネパール・ヒマラヤに限らず、ヒマラヤへの多くの登山隊は、プ・モリ、アマダブラム、といった形の美しい山や、サガルマータを代表される8,000m峰のノーマル・ルートに集中しているといえる。又、エベレスト街道、アンナプルナ周辺は多くのトレッカーが訪れ「ヒマラヤ=辺境の地」といった図式は成り立たない様に感じる。しかし、800kmを有する、ネパール・ヒマラヤである。まだまだ登山隊の入らない静かな魅力ある山々も多く残されている。特に西ネパールの山々は、標高6～7,000m級ながら面白そうなエリアである。しかし、やはりヒマラヤを目指す以上「高さ」に対するこだわりもある。ダウラギリ山群以西では、アピ(7,132m)、アピW(7,100m)、サイパル(7,031m)の3座の7,000m峰があり、私達はこの中からサイパルを目標の山とした。

サイパルは、私の最も尊敬する登山家、オーストリア人のH. ティッヒーによって1953年踏査された。そして1963年、同志社大学隊によって南稜から初登頂された。その後1985年スペイン・フランス隊によって、南西壁アルパイン・スタイル、南西壁～西稜ルートからと相次いで登頂された。北面側は1990年、北東稜より、スイス・フランス隊、オーストリア・ドイツ隊の2隊によって登頂された。今回、私達は、まだ日本隊の挑戦の無い北面を探ってみようと北面にルートを絞り準備を始めた。

登山基本計画

メンバー3人自分達で登山がしたいので、シェルパ・レス。ハイ・キャンプはテント1張りを随時移動させる、といった方法で荷物の軽量化を図る。ですから現地スタッフは、サード兼コックとキッチン・ボーイだけを雇う。食糧も現地食中心。このような方法だと荷物を減らせ、小回りも利くし、結果資金の削減にもつながった。

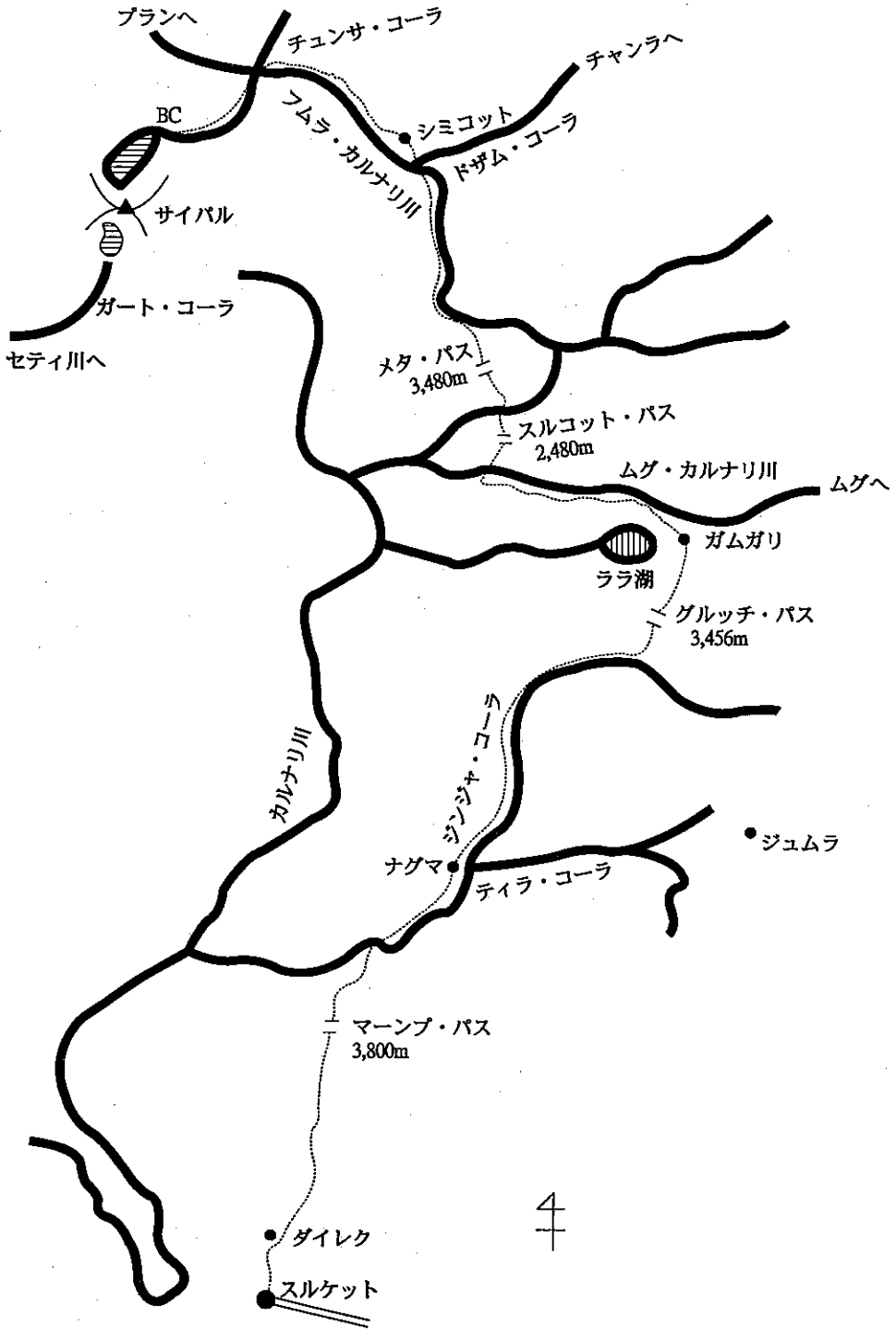
アプローチ

今回この北面ルートのアプローチを採るに際して、今秋、同じく西ネパールを目指す、「大阪山の会」の大西氏より地図、情報、アドバイスを頂き、情報不足の北面のアプローチに大きく役立った。

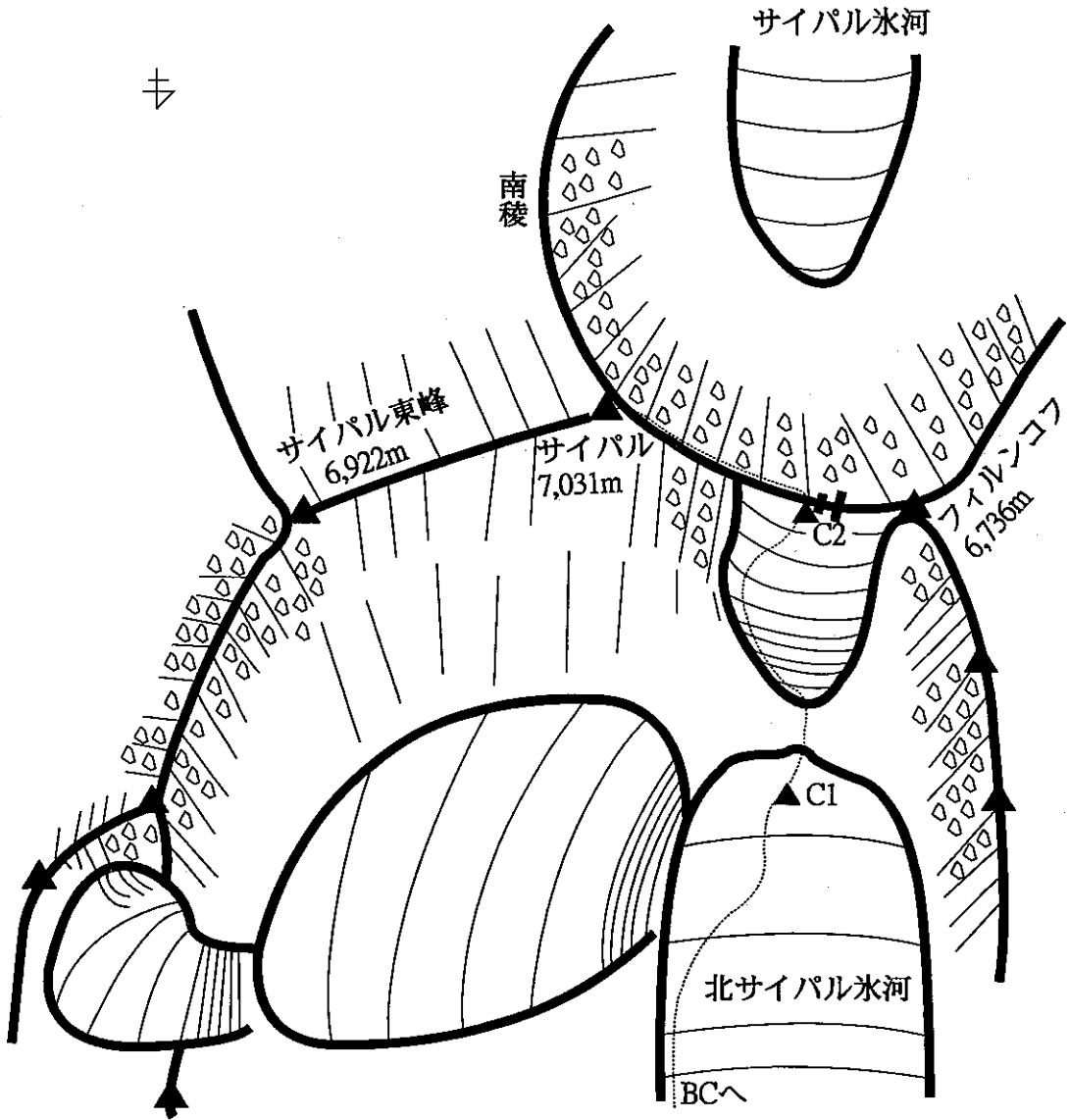
私達は登山もさる事ながら、下(アプローチ)も楽しみたい、という大きな目的が有るため、カトマンズより陸路を使ってアプローチする事に決める。昔の登山隊に比べると、まだまだ甘いかもしれないが、カトマンズよりサイパル北面BCまで約3週間、胸踊る楽しいプランである。

しかしサイパル北面の入り口となる、フムラ地方はこの春、飢饉に襲われ、又、カムパ・ゲリラが暴れているなど物騒な状況と、西のポーター事情が悪い事などから、ローカル・ポーター全員カトマンズより連れていった。

1. 登山記録



サイバル・北面キャラバンルート図



サイバル・北面ルート図

8月19日 全員カトマンズに集結する。

8月25日 チャーターしたミニ・バスにメンバー、L.O、スタッフ、ポーター、そして隊荷を満載しカトマンズを出発。

タライ平原を西に向けひた走る。この時期、雨季の影響で道路の決壊が心配されていたが、何とか無事スルケットへ到着かと思いきや、手前40kmで立ち往生のトラックと遭遇、結局スルケットからのバスに乗り換え無事26日到着。スルケットの標高は900mと非常に暑い。

8月27日～ いよいよ長いキャラバンの始まりである。スルケットよりダイレクまでは車道建設中

1. 登山記録

という事もあってか、道幅も広く、人々の往来も多い。とは言ってもエベレスト街道、アンナプルナ周辺とは違い、やはりトレッカーなどの姿は皆無。途中のバッテリーもローカルなもので、ミネラル・ウォーター、コーラなどは勿論無い。しかもこの暑さなので、生水をがぶがぶ飲まないはこのキャラバンはやっていられない。

8月28日 ダイレク着。この街はいわゆる宿場町といった大きな街で、商店、旅館などが立ち並ぶ。ダイレクを過ぎるとグッと人々の往来も減り、石楠花林の山道と変わる。

連日、小さな山の登り返しを繰り返す。標高は依然上がらず、暑い中キャラバンは続いた。

キャラバン当初苦勞したその日の昼食場所、宿泊場所の設定もリズムが掴めるようになってきた。カトマンズ・ポーターは都会生活に冒されているのか、出発当初は、連日半分のポーターしか宿泊地に到着できない。天候も比較的安定していたため、心配していたジュガ（山蛭）もそれほど多くない。

9月に入り、ジュムラに向かうべく、ティラ・コーラへと入る。しかし途中からティラ・コーラから離れ近道となるシンジャ・コーラ沿いへとルートを変えた。この谷に入る日本隊は初めてであろうか？。このあたりの橋には、カトマンズの骨董品屋に並ぶ様な人の顔の彫り物が施され興味深い。又、民家の屋根はチベット風な平屋根と変わり、ダル・パートの米は赤米である。谷は開けのどかな風景が展開する。又、この季節、予想以上に野菜、果物も豊富で、特にリンゴは1つ50パイサ（約1円）という安さであった。

シンジャ・コーラがゴルジュに溪相を変えると、ジュムラとララ湖を結ぶトレッキング・ルートへ出る事が出来た。緑の中のチョウタ・コーラ沿いのルートでグルッチ・パスを目指す。そしてこのルート上で始めてトレッカーに出会う。

草原状の美しいグルッチ・パスを越えるとララ湖東の大きな街ガムガリである。ガムガリで久しぶりに半日レストし、スタッフ、ポーター達とチャン（地酒）にありつく。

9月6日～ 当初ガムガリより大きな山越えのある尾根筋のルートでシミコットへ向かう計画であった。ローカルの人のアドバイスで、ムグ・カルナリ川沿いを下り、小さな峠を越え、フムラ・カルナリに出る。この川は大きく屈曲している為、再び峠を越えショートカット、再びフムラ・カルナリ川へ降り立つ。後は川沿いをシミコットまで進む、といったルートへと変更した。

ムグ・カルナリ川沿いの道はアップ・ダウンは少なく助かるが、道はさらに心細くなってきた。村の数も減り、ポーター達の食糧を調達するのも大変になってきた。この辺りのある村では貝殻のアクセサリーを付け着飾った女性達による、女性だけの祭り、「ハリタリカ」に似た祭りが行なわれていた。

フムラ・カルナリへ出て、この川の屈曲点をまたぐように越える、メタ・パス（3,480m）を越える。ガンジャとイラクサの多いこの峠越えは、西特有の直登ルートで今回一番の大登となった。

再びフムラ・カルナリ川に降り立ち川沿いのルートでシミコットへ向けて進む。途中、チャンラよ

1. 登山記録

りドザム・コーラが流れ込む。

シミコットはフムラ・カルナリ沿いより2時間も登る高台にある街である。この街は、フムラ地方最大の街で飛行場があり、ソーラーによる電気、電話もある。中国製品も溢れ、私達の投宿したのは「ホテル・マナサロワール」。チベット・カイラスに近づいてきた臨場感が味わえる。実際、この飛行場にもネパール・ガンジなどからレギュラー・フライトが週3便就航され、このエリアがオープンされた事で、今後カイラスへのトレッカーが増えそうである。しかし飛行機で1時間あまりの所を2週間かけて歩いてきたのはある意味では贅沢な事なのだろう。

9月9日～ いよいよサイパルの北面のBC入りである。シミコットよりフムラ・カルナリ川を溯り、チュンサで北よりチュンサ・コーラ、南よりカワ・ルンバが流れ込みいわゆる十字峡となる。サイパル北面へはこの十字峡をカワ・ルンバへ入る。この谷はさらに北サイパル氷河より流れ出るカンラ・コーラが注ぎ込む。私達の目指す北サイパル氷河末端のBCも後わずかという地点である。今回この十字峡がうまく渡れるかが大きなポイントだった。なぜなら私の持っている地図では大きく迂回するようになっていたので心配だった。しかしやはり現地に来てみるものでこれらはクリアーする事が出来、無事カンラ・コーラへ入る事が出来た。又、このカンラ・コーラ手前にはチャラという「ラマ族」の村が有り、なんとここでは、チャン、ジャガイモの入手が可能で、しかも帰路のポーター確保も大丈夫との事、BCから一日内にこういった村があるのは有り難かった。

こうして9月14日、約3週間のキャラバンの末、カンラ・コーラ沿い、北サイパル氷河舌端近く4,200mにBCを建設した。さすがにポーターも歩いて帰るのには辟易したらしく、なんと全員シミコットより飛行機で帰っていった。

登山活動

私達の建設したBCは、お花畑の咲く草原状ですぐ近くには沢が流れ、トイレも水洗である。やはりなんともいうのもうれしいのは、他の登山隊のいない私達だけの静かな村となったのがうれしい。

一応BCらしく、タルチョーはためかせ、プジャ（安全祈願）も行なった。しかし今回スタッフにシュルパ族はおらず、(これが本当のシュルパレス?) 見よう見まねの怪しいプジャとなってしまった。

9月17日～ 登山開始。まずサイパルへ取り付く為には、北サイパル氷河を溯らなくてはならない。氷河舌端より、氷河の右岸沿いにルートを採った。途中クレバスに阻まれたため、側壁を一段上に上がるとそこはお花畑となったアブレーション・バレーとなっていた。この美しいルートを進む。やがて側壁に吸い込まれてしまうため、再び氷河上のモレーンを進む。こうしてサイパル間近の氷河上のモレーン上4,800mをC1とする。

しばらくBCでレストし、9月19日よりC2へのルート工作である。サイパルの北面は北サイパル氷河の源頭部を囲む形で北東稜と西稜が馬蹄形に尾根を伸ばしていた。西稜は、フィルンコフ(6,736m)との間にコルを作っている。そして、そのコルから北サイパル氷河に向かいアイス・フォールを

1. 登山記録

落としている。私達はこの西稜のコルに上がるルートを探る事とした。

C1に向かうアブレーション・バレーより見るこのアイス・フォールは楽に突破出来ると楽観していた。やはりヒマラヤ、スケールの大きさを感じた。この左岸にルートを探り取り付くが、複雑にクレパスが横切り、次第にクレパスの埋められているデブリの方へと追いやられてしまった。やはりデブリ（しかも新しい）上をルートに採るのに抵抗があったのと、さらに上部はビルディングの様なセラック帯に阻まれ、結局このルートを放棄、一旦C1に戻る。その直後、このルート上を雪崩が襲いこの判断は正しかった。

その夜からなんとC1は雨。私達の唯一のテントはフライ無しなので、全身びしょ濡れ、惨めな夜を明かした。こうして心身共に疲れBCへ一旦引き揚げる。

モンスーンの影響の少ない、と言われる西ネパールであるが、やはり時期が少し早いのかさっぱり天候が安定しない。ルートも確定できずイライラする日々が続いた。

9月27日～ 久々の好天、今度はもう一本の北東稜にルートを探る。ここは以前、北面から登られた唯一のルートである。しかしこの北東稜、末端まで取り付くのに2つのアイス・フォールを越えなくてはならない。しかもその間は広大なプラトーになっている。又、北東稜に上がってもそこから大変長い。そうした事から敬遠していたのだ。

9月28日 このルート工作に入る。まず一つ目のアイス・フォールを抜ける。前回のアイス・フォールと比べ簡単である。クレパスを避けながら、広大なプラトーを進む。途中モレーン帯となり、アイゼンを外さなくてはならない。二つ目のアイス・フォールに取り付く。途中2本ロープをFixして、上部のクレパスを避けながら進む。こうして上部のプラトーに出ると北東稜の末端を見る事が出来た。しかし想像と違い、北東稜から伸びる支尾根は急峻な岩稜となって落ちており登れそうにない。ダイレクトに取り付くにはもう一つアイス・フォールを越え急な雪壁となる。どちらにせよ私達のこのスタイルでは難しい。再び失意の中C1へと戻る。

9月29日 再び最初の西稜のコルに出るためのルートを探る事とする。今度は前回とは反対のアイス・フォール右岸沿いを攻める。今回のルートは正解で、上手くアイス・フォールの弱点をつく事が出来た。しかしやはりあと少しで上部プラトーに出られると言う所で、再び巨大ビルディングの様なセラック帯に捉まってしまった。このまま突き進むか、迷うが、右壁沿いに掛かる雪壁沿いにルートを探る。この右壁に取り付くために綱渡り的なスノー・ブリッジを渡るルートとなった。しかし何とかコルへの見通しもたったのでBCへ戻る。

アタック体制に入りたいのだが、天候は相変わらず不順で、1週間もの間BCレストとなってしまった。

10月3日～ 天候が好天周期に入ってきた様なので、アタックに向けてBCを後にする。前回C1からアイス・フォール帯はロープをFixしておいた為スムーズに上部プラトーに出る事が出来た。コル

1. 登山記録

までは広い雪原である。コルからはフィルンコフが手の届きそうな距離まで近づいている。コル5,800 mにC 2を建設。

10月5日 月明かりの中、午前3時出発。天候は良いが風が強い。コルより急峻な雪壁となっている西稜を登る。稜は頂上に向けて盛り上がる様に伸びる。南西側は雪壁となっており、南のサイパール氷河まできれ落ち、北面側は大きく雪庇となって張り出している。自然とこの南西側の雪壁側にルートを探るのだが、1人滑落しただけでロープにつながった3人共下まで一直線である。

西ネパール山々、そしてチベットのナムナニ峰がひととき大きく望む事が出来る。

何とか順調にルートを伸ばしてきたのだが、いよいよ最後の登りで行詰まってしまった。

結局ルートを見出せず、時間も掛かってしまった事も有り、一旦C 2へと引き揚げる事とする。途中、古谷が眼底出血を起こし心配されたが時間を掛けなんとかC 2に無事帰幕する事が出来た。

10月6日 次の再アタックに向けてレスト。

10月7日 最終アタックである。古谷はやはり眼に不安があるので諦め、2人でのアタックとなった。今回も南西から強風が吹いている。ルートは南西側をたどるのでこの風を避ける場所が無い。そのため3時にC 2を出て1回も休む事も出来ず、9時まで6時間登りっぱなしであった。そして前回の敗退場所よりルートを探る。今回も前回同様のルートを探るがやはりどうしても行詰まってしまふ。最後に前回、大きく雪庇が張り出していると思っていた北面側のリッジに廻り込むと雪庇でなく、ナイフリッジとなって上部へ続いていたのだ。私達はコンティニュアス・クライミングで強風の中黙々と登り12時19分頂上に達した。2人抱き合い、久しぶりにうれしい登頂だった。

帰路キャラバン

10月8日 ハイキャンプの荷物も満載に担ぎBCへと戻る。

10月10日～ シミコットへ向けてのキャラバン。チャラのポーターを5人雇い、BCを後にした。

10月13日、14日の両日でネパール・ガンジへ飛行機で。窓からの風景は長いキャラバンを思い起こさせ感慨深いものがあった。14日のナイトバスでカトマンズへ戻った。

(チーム・サイパール・1998)